

第 24 回 熊本県小学校生活科・総合的な学習の時間研究大会 阿蘇大会

研究主題

つなぐ つなげる つながりあう 生活科・総合的な学習の時間
～「ふるさと阿蘇」の探究を通して、自己の生き方を問い続ける子供の育成～



日時／令和 6 年 11 月 22 日（金）

会場／高森町立高森中央小学校

ごあいさつ

第24回熊本県小学校生活科・総合的な学習の時間研究大会「阿蘇大会」へ、ようこそお越しくださいました。高森湧水公園や上色見熊野座神社、休暇村南阿蘇などの人気スポットを有し、教育DXや公立高校初のマンガ学科を新設した熊本県立高森高等学校でも名を広めるこの高森の地で、多くのみなさま方をお迎えし、本研究大会を開催することができますことを大変嬉しく思います。

さて、新型コロナウイルス感染症が世界中に蔓延する中、世の中には私たちが容易に解決しえない課題があることを再確認しました。そして、その解決のためには多様な他者が力を合わせ、知恵を出し合いながら、新しいアイデアや発想で立ち向かっていかなければならないことも実感しました。

多様な他者と社会や地域の問題解決に向けて取り組み、納得解を見出すために「探究」し続ける姿。学びの本質は「探究」にこそあるのだと再確認いたしました。

このように、自らの思いや願いを夢中になって実現しようとする「生活科」、問題の解決が発展的に繰り返される「総合的な学習の時間」が果たす役割は極めて大きくなっており、教育課程の中核を担う存在として、ますますの充実が求められているのはご承知のとおりです。

本大会では「つなぐつなげるつながりあう生活科・総合的な学習の時間～「ふるさと阿蘇」の探究を通して、自己の生き方を問い続ける子供の育成～」を大会主題として、会場校である高森中央小学校の2年生による生活科の授業と、5年生による総合的な学習の時間の授業を公開していただきます。

そして、公益財団法人阿蘇グリーンストックの増井大樹様に「阿蘇の草原の恵みと課題」と題してご講演いただきます。

毎年日本各地から、また海外からも多くの人々が訪れる観光地「阿蘇」。日本有数の食糧生産基地であり、希少動植物の生息地でもあります。この阿蘇の広大な生命資産を保全し後世に引き継ぐ営みは、大人も子供も無関係ではいられない問題です。本日は、貴重な2本の提案授業と問題提起していただきます講演を通して、人や自然と正面から向き合い、対話し協働しながら、生活科と総合的な学習の時間の学びを一層広め深めてまいりましょう。

結びになりますが、本大会を開催するにあたり、ご支援をいただきました熊本県教育委員会、阿蘇郡市各市町村教育委員会と阿蘇郡市教育研究会生活科・総合的な学習時間部会のみなさま、並びに会場校である高森中央小学校の先生方、そして、本大会の開催に向けてお力添えをいただきましたすべての皆さま方に深く感謝申し上げます、あいさつといたします。

令和6年11月22日

熊本県小学校生活科・総合的な学習研究協議会 会長 池田 由美

ようこそ阿蘇へ

第24回熊本県小学校生活科・総合的な学習の時間研究大会 阿蘇大会にご参加いただき、誠にありがとうございます。

世界最大級のカルデラを有する雄大な自然、広大な草原、歴史ある文化など、数々の魅力にあふれる私たちの「ふるさと阿蘇」で、この研究大会を開催できることを大変光栄に思います。

ご承知のとおり、2016年の熊本地震は、私たちの生活を大きく変えました。阿蘇の復興は、いまだ道半ばではありますが、地域住民の不屈の精神と多くの方々からの温かいご支援により、少しずつではあるものの新しい阿蘇の姿が生まれつつあります。そのような中、目の前にいる子供たちは、幼いころに震災を体験し、また、震災後に生まれ、復興のシンボルとして確かな歩みを続けています。

阿蘇地域の学校では、震災後の困難な状況を乗り越え、子供たちの学びを支え、未来を担う人材育成に尽力してまいりました。そして、地域に根ざした探究的な学習を通して、子供たちが自ら考え、行動する力を育む教育活動を推進してきました。

本日の研究大会では、阿蘇の豊かな自然や文化を題材とした授業や実践事例を発表し、皆様と学びを深めたいと考えています。特に、地域の宝である自然環境については、公益財団法人阿蘇グリーンストックの増井 大樹 様よりご講演を賜り、貴重なご意見を頂戴できることと存じます。

最後に、本大会の開催にあたり、ご後援いただきました熊本県教育委員会、阿蘇郡市各市町村教育委員会、熊本県生活科・総合的な学習教育学会の皆様をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

本日、皆様とともに、「ふるさと阿蘇」の探究について語り合い、未来へ向けた新たな一歩を踏み出せることを楽しみにしています。

令和6年11月22日

第24回 熊本県小学校生活科・総合的な学習の時間研究大会 阿蘇大会

実行委員長 新川 晃英

1 はじめに

つなぐ つなげる つながりあう 生活科・総合的な学習の時間 ～課題の探究を通して、自己の生き方を問い続ける子供の育成～

新型コロナウイルスの世界的流行をはじめとする社会の急激な変化の中で、社会の在り方そのものが、これまでとは非連続と言えるほど劇的に変わりつつある状況に直面している。そのような予測困難な時代において、私たち一人一人が社会の担い手として、答えのない問いにどう立ち向かうかが問われている。その中で、自ら課題を見だし、多様な考えを持つ他者と協働的に解決し、新たな知や納得解を生み出すことなど、正に新学習指導要領で育成を目指す資質・能力が一層強く求められていると言えよう。

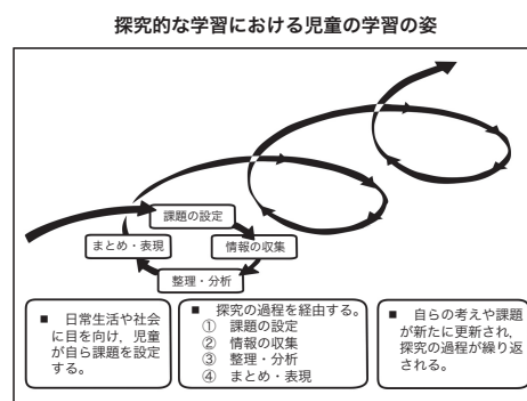
令和3年1月の中央教育審議会答申では、2020年代を通じて、実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、その姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」としている。「個別最適な学び」が「孤立した学び」であってはいけない。そのためには、これまでも重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士であるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の担い手となることができるよう「協働的な学び」を充実することが重要となる。

これらのことは、具体的な活動や体験を通して自分の生活を豊かにすることを目指す生活科や、探究的な活動に主体的・協働的に取り組み自己の生き方を考えることを目指す総合的な学習の時間の目標と一致するところである。つまり、生活科や総合的な学習の時間の充実を図ることは、今求められる力を育むことに大きく寄与することにつながっていく。

2 主題について

(1) 「つなぐ つなげる つながりあう」とは

小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編において「探究的な学習における児童の学習の姿」として図のような一連の探究プロセスが示されている。この探究的な学習において、「自己の生き方を問い続ける子供」の姿を導き出していくためには、探究プロセスの「質」を高めていく必要があると考える。そのための視点を以下に示す。



① 「つなぐ」とは、「教師がファシリテーターとしての役割を果たすこと」である。

1つ目は、主体的な探究活動に導く「課題設定」をするという役割である。私たちは生活科・総合的な学習の時間の探究的な学習において、子供の「主体的・対話的で深い学び」を実現したいと考えている。しかし、子供の思いや願いを基にした探究活動になっていなければ、そこに解決するための必要感や切実感はなく、ゴールイメージも持てないまま学習をスタートさせることになってしまう。

そこで、子供が「何とかしたい」や「こうしたら解決できそうだ」という思いや願いを基に課題設定をしたり、子供が辿り着きたいイメージをもって探究し続けることができるような単元構成を工夫したりすることが、教師には求められる。このようなファシリテーターの役割を教師が果たすことで、子供が求める、子供主体の探究活動が展開されると考える。

2つ目は、子供の探究活動において、各教科等で身に付けた資質・能力が十分に発揮されるように学習内容を意図的につなぐ役割である。例えば、社会科の資料活用の方法を生かして情報を収集したり、算数科のデータの活用での学びを生かして情報を整理したり、国語科で学習した文章の書き方を生かして分かりやすいレポートを作成したりすることなどが考えられる。また、理科で学んだ生物と環境の学習を生かして、地域に生息する生き物の生育環境を考えることなども考えられる。このように各教科等で学んだことを総合的な学習の時間に生かすことで、児童の学習は一層の深まりと広がりを見せる。

このように、合科的・教科横断的な学習を通して、子供の活動と各教科等で身に付けた力を意図的につなぐ工夫をすることも教師の大切な役割である。

視点1 子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫（つなぐ）

- ・子供の思いや願いを引き出すための対象や事象との出会い方の工夫
- ・合科的・教科横断的な授業デザインの展開

② 「つなげる」とは、「探究活動をリフレクション（振り返り）でつないでいくこと」である。

自分が実現したいことに向かって課題解決に取り組む子供やゴールイメージが明確な子供は、どうしたら自分の中で思い描いていることを実現できるのか、どうしたら目指すゴールに近づけるのかと内省する。考えたことは書くことによって整理される。整理しながら「〇〇ならばもっとうまくいくのではないか」とよりよく改善していく方法や次にやってみようことが浮かんでくる。それは、その子供の考えや新たな課題を自覚することにつながり主体的な学び、探究のスパイラルを加速させていく。つまり「振り返り」とは、自分の学習を振り返ることで、自分の学習状況を俯瞰的に捉えるとともに、次はどうしたらいいのかを考えて、新たな自分の目標（課題）を設定し、次の学習の見通しをもつことである。

振り返りでは、「何をどのように振り返り、次にどうつなげるか」を明確にすることが大事である。振り返り際には、例えば、「目標や課題と照らし合わせ、次はどう改善するのか」という視点で設けることで、理解状況や達成状況についてより高次に捉えることができるだろう。また、「前時と本時の学びを関連付け、次にどう生かすのか」という視点を設けると、知識をつなげたり一般化したりすることができるだろう。さらに、「授業前後の考え等を比較し、自分の何がどう変わったか、これからどうしていきたいか」という視点を設けると、自己変容について自覚することができるだろう。

このように、学習後の記録としてだけではなく、昨日の自分が考えていたこと、今日の自分が考えたこと、明日の自分にさせたいこと、先の自分が目指していることなど、単元全体を見通し、導入・展開・終末等、効果的な振り返りの場を随時設定していく。

また、子供の振り返りの記述を基に、次の探究活動へつなげていくことも教師の大切な役割である。例えば、振り返りの中で子どもが抱えている問いを見取り、それを全体で共有していく中で課題を立ち上げ、子供が次の探究活動へ向かえるようにしていく。また、振り返りの中で個々の子供の考えのずれを見取り、その考えのずれを表出させることで対話を促し、協働的に解決していく場を設ける。その中で、曖昧な点を明らかにしていくことで、更なる次の探究活動へとつながっていく。

このように、振り返りを書く際の視点を設けることや、振り返りを次の探究活動へと生かしていくことが、子供自身が自らの学びを自覚し、次の学びへとつなげることになる。

視点2 自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫（つなげる）

- ・振り返りを書く際の視点の工夫
- ・振り返りを生かし、次の探究活動へつなげる指導の工夫

③ 「つながりあう」とは、「一人一人が自分の思いや考えを基に、課題解決に向け仲間と協働すること」である。

問題の解決に向けた活動は、1人で行うのではなく多くの人と協働していく。その中で子供は、自分の情報を他者に分かりやすく伝えたり、他者からの情報を受け取ったりしていく。自分の考えを出し合うだけでなく、それぞれのもつ情報や考え方を比較したり、分類したり、関係付けたりしながら課題解決に向けみんなで考えていく必要がある。しかし、子供まかせの話し合いでは、一部の親しい関係の子供だけで話が進められたり、話すことが得意な子供の考えがグループ全体の考えになってしまうこともある。すべての子供が誰でも学び合いに参加し、他者とつながり課題の解決に向けた話し合いを進めるためには、「考えるための技法」を身に付けていくことが必要である。例えば、生活科では子供がそれぞれに様々な情報を集めてくる。教師がその情報を提示しながら「似ているものはないかな」「もっと知りたいものはどれかな」などと問いかけ、子供の考えを聞きながら整理していくことで、ばらばらだった情報が子供の意図で整理・可視化される。そして、それらを皆で見ながら考えることで「これはどこで見つけたの?」「もっと教えて」という子供同士の自然なかかわり合いが生まれ、さらには、カードや短冊などを見比べることで、違いに気付いたり疑問に思ったことを尋ね合ったりするようになる。このようなかかわり合いをきっかけに、課題解決に向けた対話が生まれていく。

順序付ける・比較する・分類するといった思考を可視化するためには、思考ツールの活用も考えられる。子供が自ら思考したことを、目の前で操作したり可視化したりする思考ツールの活用により、自分の思考が整理され、課題解決の際にも生かされていく。子供たちは友達と思いや考えを整理する活動を通して、協働することのよさや難しさに出会う。

そして、試行錯誤しながら納得解を生み出していくことで協働することのよさや楽しさを実感していく。探究活動を通して、みんなで作り上げたカードやシートは、これまでの子供の学習を記録した「学びの足あと」とであるとともに、協働的に探究する子供たちが次の課題を解決していくための「道しるべ」の役割を果たしていくと考える。

視点3 課題解決に向け、子供同士のかかわり合いを生み出すための工夫（つながりあう）

- ・ 考えや意見を整理し、可視化する工夫
- ・ 思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）

(2)「自己の生き方を問い続ける」とは

「自己の生き方を問い続ける」とは、社会や自然の一員として、自分は何ができるか、どのようにすべきかを考えること、自分にとっての学ぶことの意味や価値を考えていくこと、学んだことを自分の人生・将来につなげていくことである。

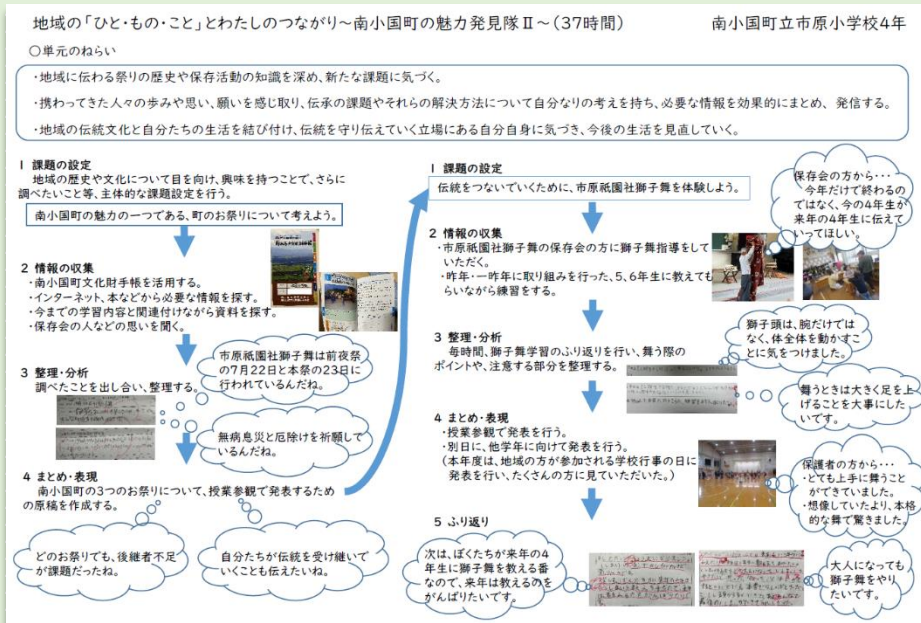
このような姿を育成するために、生活科では、自立に向けて学びを実生活に生かし、よりよい生活を創造していく力の育成が大切である。自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつことが、現在及び将来における自分自身の在り方を求めていくことにつながるからである。また、総合的な学習の時間では、事象に対して多様な角度から捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自分なりの納得解をもち、社会に関わっていこうとする姿が求められる。この土台があってこそ、自己の生き方を問い続ける子供の姿が期待できるのである。自己の生き方を問い続けることは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往還する中で、一人一人が探究する学びの原動力となっていく。そして、一人一人が持続可能な社会の担い手として、質的豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していこうとすることである。

つなぐ つなげる つながりあう 生活科・総合的な学習の時間 ～「ふるさと阿蘇」の探究を通して、自己の生き方を問い続ける子供の育成～

視点1 つなぐ

子供の思いを引き出すための課題設定と単元構成の工夫

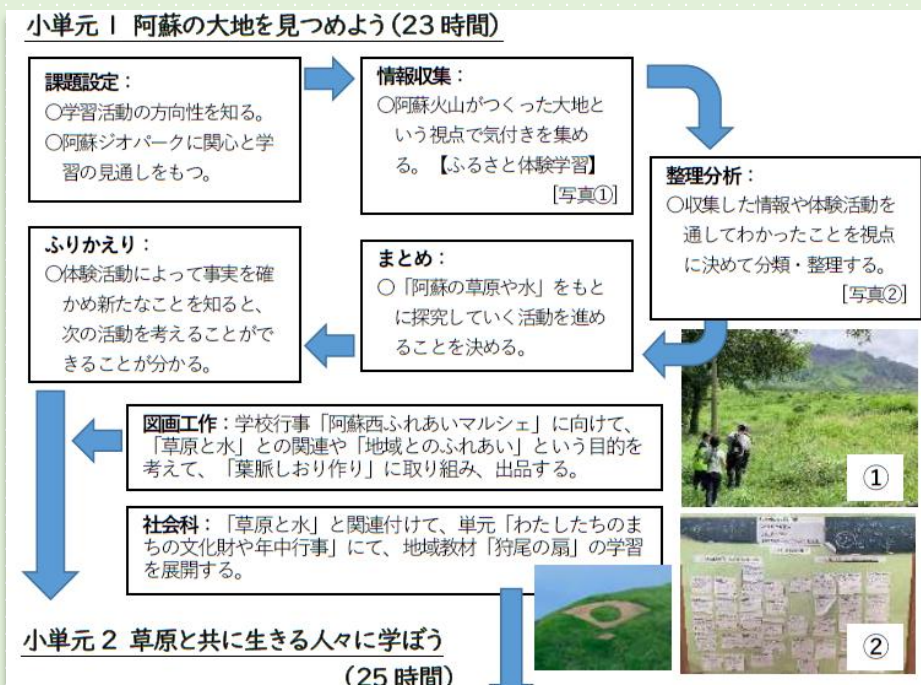
・子供の思いや願いを引き出すための対象や事象との出会い方の工夫



単元「地域の『ひと・もの・こと』とわたしのつながり～南小国町の魅力発見隊Ⅱ」では、地域の祭りや伝統芸能について調べたり、体験したりする活動を通して、地域の歴史や文化について関心を高め、子供たちの思いや願いを基に課題設定を行うことができるよう単元構成を工夫した。

<市原小学校 第4学年 総合的な学習の時間>

・合科的・教科横断的な単元デザインの展開



単元「阿蘇の大地を見つめよう」では、探究活動において、図画工作や社会科等で身に付けた資質・能力が十分に発揮されるように学習内容を意図的につなぐ単元デザインを行い、学習の一層の深まりと広がりをつなぐため、探究活動を展開した。

<阿蘇西小学校 第4学年 総合的な学習の時間>

視点2 つなげる

自らの学びを自覚し、次の学びにつなげる振り返りの工夫

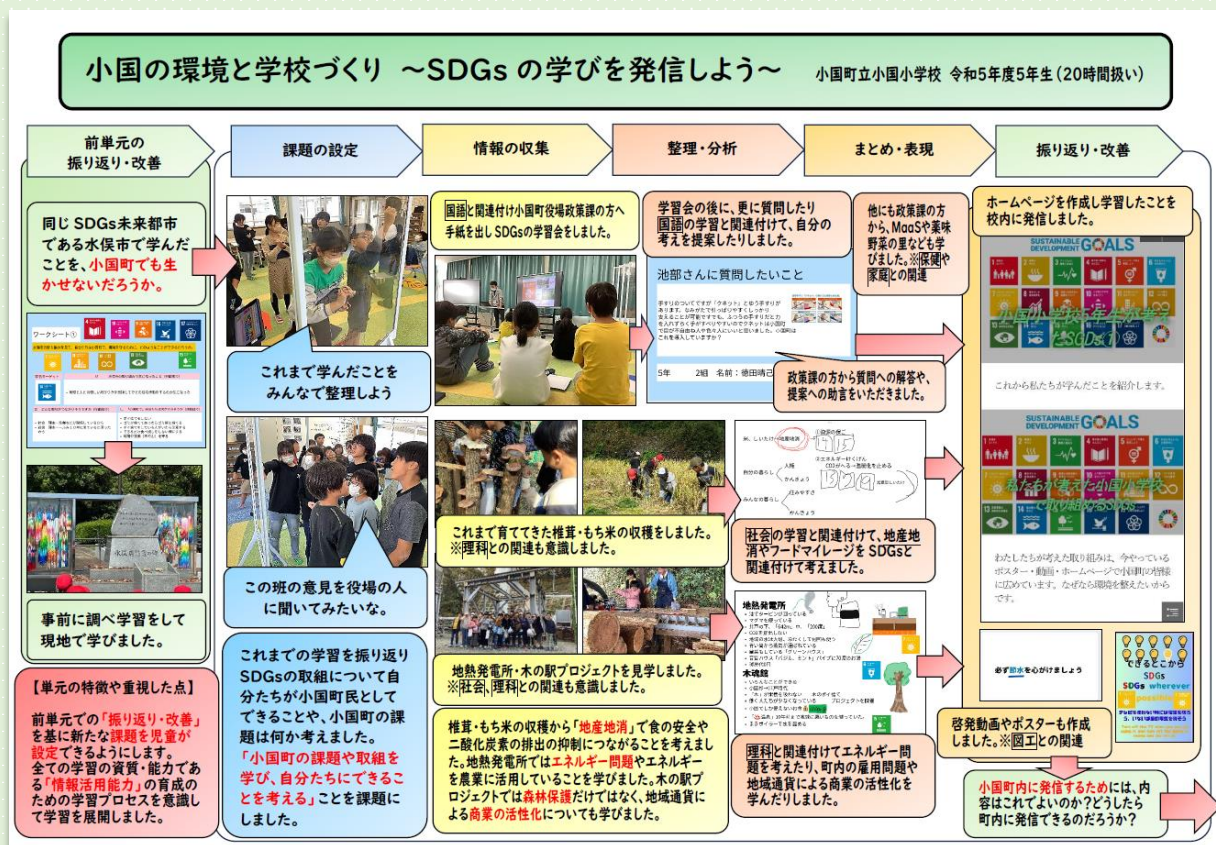
・振り返りを書く際の視点の工夫

単元「つながる ひろがる わたしの生活」では、「おしごと先生」への返し(手紙)を考える場面で、国語の「動物園のじゅういさん」の学習で使った感想の視点(初めて知ったこと・すごいと思ったこと・自分とにていること)を示し、自分の書きたいことを焦点化して取り組ませた。これらは、学びの足あととして児童がいつでも振り返えられるように廊下に掲示した。

<産山学園 第2学年 生活科>



・振り返りを生かし、次の探究活動へつなげる指導の工夫



単元「小国の環境と学校づくり~SDGsの学びを発信しよう~」では、前単元での「振り返り・改善」を生かし、次の探究活動へつなげることができるよう単元構成を工夫した。また、教科等との関連を明確にすることで、子供たちは意欲を持ち、新たな問いを生み出しながら主体的に活動することができた。

<小国小学校 第5学年 総合的な学習の時間>

視点3 つながりあう

課題解決に向け、子供同士の関わり合いを生み出すための工夫

・考えや意見を整理し、可視化する工夫



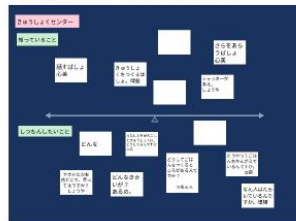
↑ 自動車の機械を直すのがすごい



↑ 買い物に来られたお客さんのことを考えて、品物は並べられているんだ。



↑ 給食センターでは手を何回も洗っているんだ。



↑ 思考ツールを使って考えをまとめる。

単元「もっとなかよし まちたんけん」では、給食センターを探検し、「知っていること」と「質問したいこと」を思考ツールで整理し、可視化することで、全員で確認することができた。また、秋のスズラン公園を探検して、「春の様子」と「秋の様子」を思考ツールでまとめ、春と秋の違いや、春に見つけた花が秋にはどんなふうになるのかについて確認することができた。

<波野小学校 第2学年 生活科>

・思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）



単元「たのしい あき いっぱい」では、思いや考えを共有する場の工夫（学習環境づくり）として、他校の1年生とのリモートでの交流の場を設定し、自分で考えたおもちゃを紹介する活動を行った。他校の1年生におもちゃを紹介するという目的があることで、児童が意欲的に作成発表することができた。また、交流を通して、同じ阿蘇地域でも自分の地域周辺にはない秋の自然を知ることができた。

<一の宮小学校 第1学年 生活科>

単元「たのしい あき いっぱい」では、リモートで交流した他校の1年生の取組から、おもちゃ作りへの意欲を高めた。「地域の保育園児を招待して一緒に遊ぼう」というゴールを設定し、秋の自然物の特徴を生かした多様なおもちゃ作りに取り組んだ。

<南阿蘇西小学校 第1学年 生活科>

小単元4 つくってみよう！秋のお宝大変身！！



保育園さんを招待して、つくったおもちゃで一緒に遊ぼう！という最終ゴールを伝えると、さらに意欲が高まった。まずは、小単元3で作ったクイズをお互いに出し合い、自然物の特徴を全体で確認した。その後に、特徴を生かしたおもちゃを考えていった。ヒントコーナーに貼っていた他校のおもちゃを参考にしたり、自分なりに工夫したりしながら、友だちと協力してどんどんつくっていた。サッカーゲーム、ままこと遊び、どんぐりくじなど、想像を上回る多様なおもちゃを生み出していた。

「ふるさと阿蘇」の探究を通して、自己の生き方を問い続ける

「ふるさと阿蘇」の探究とは、「ふるさと阿蘇」ならではの良さや特色を生かした課題や災害復興、心配される地域の将来など実情を見据えた課題を設定し、子どもたちが自己の生き方との関連性の中で深く考え、より良い解決に向けて探究的な学習に取り組むことである。

このような学習を通して「自分で解決できた」という自信や「学んだことがふるさと阿蘇に役立つ」という自尊感情が育まれ、社会への参画意識が高まると考えられる。

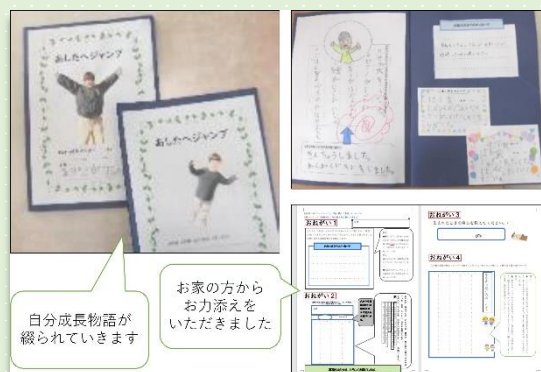


単元「つたわる 広がる わたしの生活」では、校区探検を通して、ふるさとの方々との出会いを大切に学習に取り組んだ。子供たちがこれまでの学習から学んだふるさとのことを学習発表会で伝えた。保護者から「ふるさとのことを思う気持ちが伝わってきました。」などの感想が寄せられた。

〈久木野小学校 第2学年 生活科〉

単元「あしたへ ジャンプ」では、1年間の活動を振り返りながら、大きくなった自分を見つめ、家族からのメッセージや生まれた時のことを聞き取ったりする活動を行いながら、「自分成長物語」を完成させた。活動の中で、自分が家族に支えられて成長したことや友達の意外な一面に気付くことができ、これからの生き方を見つめる機会となった。

〈山西小学校 第2学年 生活科〉



⑧自分のくらしをみつめ、「命」「協力」「助け合い」に関係するくらしを綴り、発表する。

(聞いた人は、お返しの手紙を渡す。)

<p>牛が生まれた話 (手紙)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくも、牛のお世話をしているから、気持ち分かるよ。 ・私も、動物を助ける仕事に入りたいとおもっているから、お世話頑張ろうね。 	<p>熊本地震の時のお父さんの話 (手紙)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お父さんは、人思いだね。 ・家を建て直したというのが、ぼくのじいじと同じと思いました。 ・ぼくも、大工になりたいと思っているよ。 	<p>熊本地震の時のおじいちゃんの話と自分の頑張り (手紙)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私も小さいときにお店の手伝いをしました。 ・ぼくも、弟のお世話をしているよ。 ・おじいちゃんは、とてもいい人だね。
<p>自分が毎日している家の仕事の話 (手紙)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎日いろいろな仕事がある日でもやっているのがすごい。 ・家族のために、お手伝いをしていますごい。 ・ぼくもお手伝いががんばります。 	<p>熊本地震の時、コロナ期間のお父さんの話と自分がしたこと (手紙)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お父さんは自分より人のことを心配しているのがすごい。 ・私も、お母さんが疲れて帰った時に、手伝いをしていますよ。 	<p>お父さんの仕事ことと自分がしていること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お父さんの気持ちは、おそう式で、じいちゃんが亡くなってさびしいぼくの気持ちといっしょです。 ・ぼくも、妹のお世話をがんばっているよ。

単元「見つめよう！命とくらし『6.26 白川大水害に学ぶ』

では、ふるさと阿蘇で実際に起こった災害について、地域の水害記念碑を調べたり、ゲストティーチャーの体験談を聞いたりして収集した情報を基に、「命」「協力」「助け合い」の大切さに気付き、自分のくらしを振り返った。熊本地震やコロナ禍の際の家族の様子を見つめ、これからの自己の生き方を考える子供たちの姿がみられた。

〈南阿蘇西小学校 第4学年 総合的な学習の時間〉

講演

演題／「阿蘇の草原の恵みと課題」

講師／ 増井 大樹 氏（公益財団法人阿蘇グリーンストック）



<プロフィール>

鳥取大学大学院農学研究科（生物資源環境学）修了後、（株）プレック研究所に入社、その後岐阜大学連合農学研究科（農林環境科学）、真庭市役所（林業・バイオマス産業課）を経て2022年より現職。学生時代より一貫して日本の草原に関わり続けている。近著に、愛しの生態系（文一総合出版）、景観生態学（共立出版）、森林学の百科事典（丸善出版）（いずれも分担執筆）。博士（農学）、技術士（環境部門）

アンケート

本研究大会にご参加いただいた皆様へアンケートのご協力をお願いします。

<https://x.gd/L0QRj>



【回答期限：11月29日（金）】